
Brigid Brophy : *Beardsley*
and his world 管見

河村 錠一郎

アメリカの才女ソングに対しイギリスには才媛ブローフィがいる。日本へは小説家として、『雪の舞踏会』(*The Snow Ball*, 1964)が翻訳紹介されたが、彼女には小説の他に文学研究、批評、評伝の類がかなりある。ピア

ズリーについての著作は、これが二冊めで、前作は *Black and White* というタイトルで副題に〈オーブリー・ピアズリーの肖像〉とあり、これは『黒と白』という表題で翻訳されている（昭和44年、求竜堂。）

前作の *Black and White* にはいろいろと批判もあった。フロイトの流儀に従ってピアズリーを徹底的に母親とピアズリーの性心理的葛藤と癒着の視点で分析したもので、あまりにフロイトの眼鏡をかけすぎている、という批判である。しかし、視点が明瞭なだけに論点のはっきりしているこの小著はピアズリー解釈の一つとして、ピアズリー研究の歴史にそれなりの貢献をした。ひょろ長い女性像は幼児のピアズリーが母親を見上げる視角である、という考察は、ひょろ長い像を描く意味でマニエリスム作家の一人である云々といった不用意な記述（マニエリスムがこんなに簡単に定義できるものならまったく世は太平楽である）があるにもかかわらず、一児の母親として幼児の世界を熟知している女性らしい鋭い指摘と評価してよい。

この『黒と白』は、事実問題に関してはリードが画集 *Beardsley* (1967年) に付けたかなり長文の序文に明らかに負っているし、解釈にしてもかなりこれを参考している。ただし、両者が決定的に違う点も幾つかあり、ピアズリーの固定観念である（といっても彼の作品に描きこまれ形象化されて残っている）胎児イメージの読み取り方の相違もその一つであった。リードの方はこのイメージないし図柄がある期間に集中的に現われたことを足がかりに、当時のさまざまに乱れとんだ臆測や伝説あるいはゴシップをまったく根拠なしとはせず、ピアズリーの姉の不倫の恋と隠された出産をそれとなく暗示しているのに対し、ブローフィはそれを純粹に心理的なものとして読み取って精神分析的解釈に終始し、胎児イメージの横溢はピアズリーの自虐的自

伝——生ききらぬうちに子宮から墓場へ走り抜けたもの——として理解している。このことは『ピアズリーとその世界』でも変わらない。変わらないどころか、確認されている。

『ピアズリーとその世界』は美術関係の出版社として知られている Thames and Hudson の〈作家とその世界〉シリーズの一冊である。シリーズのなかには『ジョン・ダン』や『ヘンリー・ジェイムズ』など文学者を扱ったものもあれば『ルイ14世』や『ネルソン』といったいわゆる歴史的人物もあり『アンデルセン』など童話作家も取りあげられ『ドラクロワ』など画家たちもむろん扱われている。シリーズの眼目は単純な伝記でも作品論でもなく、作家なり歴史上の人物なりをその時代とその場所において、つまり空間的・時間的 milieu において捉えることにある。したがって、ただの伝記ではないにしても、個人の人生記録的な面はかなり強くなるが、その意味で類書や既刊の伝記や研究書の類を退ける独自性を主張するには、いささかでも新事実の発見が、この種の本として欠かせないであろう。同時に、事実の羅列ではないはっきりとした筆者の主張が対象を見る鮮明な視角という形で存在しなければならない。ブローフィの『ピアズリーとその世界』の場合、後者についてはすでに触れたが、前者についても、ブローフィはかなりの成果をあげている。しかも、そのことと精神分析的読みとりがかかっている、あるいは少なくともそのように絵解きされている。

つきとめられた新事実の一つは1881年（推定年代）に両親とともにロンドン郊外の町 Epsom の Ashley Road 35 あるいは 37 番地に2年ほど移り住んでいたというもの。また1883年（推定年代）に姉メイベルと子供二人だけが預けられた先の叔母さんというのは母方の Sarah Pitt のことであり、そこから姉弟はブライトン・グラマースクールへ

通ったが授業料の支払名義人はこの叔母になっていることもブローフィの調査結果で明らかになった。この中学校は当時は Buckingham Road 80 番地にあり、ピアズリーの生まれたのは同じ通りの 31 番地である。(いまは建物は残っているが学校ではない。) また先の Epsom はピアズリーの生涯にもう一度登場する。1896 年の夏をピアズリーはその町のホテル The Spread Eagle で過ごしているのである。1893 年にピアズリーはバリ訪問から帰国し親から独立して姉と新居を構えた。以下ブローフィを引用する――

ビムリコ地区ケンブリッジ通り 114 番の新居はピアズリーが二つ前の住居と同じ通り、つまりは「ケンブリッジ・ヴァライティ劇場」の通りへ戻ってきたということである〔訳註・ブライトンからロンドンに出て来たピアズリー一家はケンブリッジ通り 32 番に借家住まいをしたがピアズリーがバリへ発つまでに一度引越している。芝居好きでよく家のなかで演じた姉弟は戯れに新居をケンブリッジ劇場と名付けた〕。ピアズリーの行動には昔の場所に舞い戻るといふ、ちょっとした、しかし非常に意味のあるモチーフが潜んでいる――まるで空間的な後戻りによって時間的にも後戻りができ、それによって寿命を引き延ばすことができるというように。この後戻りのパターンはピアズリーが自分の生まれた家と同じ通りにある学校へ行かされたときに始まったのだ。その後ピアズリーはかなり頻繁にブライトンへ戻ったであろう。1896 年には、病気の重くなったピアズリーはイブソム〔訳註・Epsom はかつては保養地として知られた町である〕に戻った――スプレッド・イーグルというホテルに滞在したのだが、このホテルはピアズリーが子供の頃住んだことのあるアシュリー通りの先

端にある。

この先でブローフィはピアズリーが *Who's Who* (『紳士録』) の問合せに応じて自分の履歴を答えたとき、用紙に自分の誕生日を二年も前へずらして記入した事実を報告し、「まるで命を二年延ばそうとするかのごとく」と記している。果して、そうだろうか。*Who's Who* のような公のものに自分の記事を載せるといふとき、自分のもっとも内なる扉を減多に他人に開けて見せることなく、逆に自分で自分をからかって見せるようなピアズリーである。ブローフィの「子宮から墓場へ」の絶望のモチーフは、むしろ究極的には子宮への帰還を願望している退行現象モチーフとして考えるべきではなかろうか。ピアズリーは自分を最もよく見知っているものとしての自分の保護者のもとへ常に帰ろうとしているのである。胎児イメージあるいは固定観念も一つにはそれではなかろうか。そういう幼児性の自覚は時にまったく逆の行動に人を走らせる――つまり背のびした大人に見せようとする。*Who's Who* エピソードはその一つの機会であったのではないか。しかもにやにや笑いながら、である。「子宮から墓場へ」の陰惨なモチーフに動かされて年を二つさば読みしたと考えるのはおかしくはないか。

ともあれ、統一的なピアズリー観の枠のなかに、調査によって得た新事実を含め、ピアズリーの生涯そしてピアズリーを取り巻いていた社会を豊富な写真を導入して展開して見せた腕は大変読みごたえがある。装飾画を芸術絵画のレヴェルに押し上げて美術史に変革をもたらした第一人者としてのピアズリーの功績について、もう少し突っこんだ実証的論述展開が欲しかった点と、ワイルドの『サロメ』の挿絵に関して、どれとどれが削除を余儀なくされどれがどう修正されたかの事実問題の記述に、間違い、いや少なくとも誤解を

招く記述がある点を除けば、単なる啓蒙的シリーズものの一冊として軽んじることはできない、かなり劃期的な著書といえよう。最後に一つ注文をつけるとすれば、ビアズリーを埋葬してある南仏の共同墓地にはちゃんと固有名詞があるのだからそれを記すべきで、ただ 'old cemetery' では困る。ブローフィを頼りにお墓探しをして筆者はひどく苦労した。

Brigid Brophy: *Beardsley and his world*,
London, 1976